

〔資料〕

瀬戸陶磁器産業調査研究について

—旧産業科学研究所史の発掘—

笠井雅直

はじめに

名古屋学院大学の研究の拠点である総合研究所の前身であった、かつての産業科学研究所の特徴は、教員に対する研究上の支援をおこなうことだけではなく、大学あげでの全体研究を推進したことであった。研究は基本的には各教員の個人的な作業であり、研究途上で収集された各種の文献資料は、一般には公開されることはないし、それを前提としたものでもなかった。共同研究を分担する各教員においても同様であろう。しかし、名古屋学院大学産業科学研究所が推進した共同研究のうち、陶磁器産業に関する調査研究については、参加した教員が調査研究で収集した資料が、概ね旧産業科学研究所の倉庫にそのまま保存されていた。調査研究時点において、その現状分析に必要であった資料は、その後、何十年かを経過する中で、貴重な歴史資料としての価値をもつようになった。資料一覧を作成することで、その資料を公にすることも意義あるものと思われる。

なお、産業科学研究所から総合研究所への組織替え（2000年4月）は、名古屋学院大学に設置されていた外国語教育研究センターなどの研究機能を一つに統合して、一層の教育研究の発展を目指すという観点からであり、併せて、時代が要請する課題についても機動的に研究所あげでの体制で対応しようとしたものであった（1998年度からの万博プロジェクト研究がその一つ。『名古屋学院大学の現状と課題』1997年度・1999年度）。

一 調査研究の概要

日本各地の陶磁器産地は、1971年のニクソン・ショック、1973年の第一次のオイル・ショック、そして1985年の円高進、1986年の円高不況によって、深刻な打撃をうける。産業科学研究所の調査研究は、ちょうどその時期に、大学の立地する瀬戸の陶磁器産業調査研究からはじまって、全国の陶磁器産地の調査研究、そして産地の振興策へと調査研究の範囲を拡大していく。

発端は、名古屋学院大学が、1968年からの「債務問題」に呻吟する「困難な10年」の最中に、「しかしそうした状況にあっても、研究活動は地道に行われて成果を現しつつあり」、「1972年の末には学内で共同研究チーム編成の動きが興った」ことであった（後掲、文献資料No. 020。以下、No. のみ表記）。1975年には小林茂を代表に14名のメンバーによる共同研究チーム（地域研究会）が生まれた（020、『名古屋学院大学20年史』も参照、以下、同様）。名古屋学院大学が「地域の学術研究センター的役割を果たしよう」という意味で地域と遊離しない大学でなければならないと

いう自省から」、産業科学研究所内に「地域研究会」が設立されたのであった(011)。

地域研究会は、「地元の瀬戸および周辺の諸地域の産業実態の調査、とりわけ瀬戸の地場産業である陶磁器産業の調査と研究」を推進する(013)。名古屋学院大学の瀬戸・品野台への立地に際して、共同歩調をたもっていた瀬戸市も、当初の1975年から毎年、研究補助金を産業科学研究所に交付する(020)。

最初の成果が、『瀬戸経済圏の現状分析と将来のヴィジョン—地場産業を中心に—』に関する昭和50年度地域研究経過報告書』(名古屋学院大学産業科学研究所, 1976年)であった(011)。研究代表者は産業科学研究所の所長横井弘美であり、この報告書をふまえて、さらに、「アンケート調査と聞き取り調査を含む実態調査が不可欠と」するに至った(001)。この実態調査を基礎とする手法は、その後の産業科学研究所の調査研究において踏襲されることとなる。最初の実態調査は、『瀬戸地域地場産業等実態調査中間報告』(名古屋学院大学産業科学研究所, 1978年3月)(004)に結実している(産業科学研究所所長は山崎誉雄)。

さらに、1977年度から1979年度の3か年にわたり、文部省科学研究費補助金の交付を受けてすすめた「愛知県陶磁器産業物流実態調査」は、小林茂を研究代表者として、教授、助教授、講師の総勢13名からの分担者から構成された大規模なものであった。その前提となったのは、すでに見た、1975年度から開始していた瀬戸陶磁器産業の実態調査であった。同補助金を得て1978年度からは瀬戸以外の陶磁器産地を調査研究するに至る(地域研究会の代表は西村嵩夫)(008)。

この実績から、「瀬戸市、瀬戸商工会議所、愛知県陶磁器工業組合、瀬戸輸出陶磁器完成工業組合等諸団体、通産省や愛知県商工部の関係する実態調査に参画」する機会を得て、かなりの報告書の作成に携わるに至る(007, 011)。最初のものが、『愛知県産地中小企業振興ビジョン—瀬戸陶磁器産地(愛陶工関係)—』(愛知県商工部, 1979年11月)(038)であり、当該の調査・振興策を担当したのは、愛知県産地中小企業対策推進協議会の構成員となっていた西村嵩夫と柿野欽吾であり、瀬戸陶磁器産業についての、これまでの研究の成果が生かされたものとなっている(038)。

外部機関との共同による調査研究に対応すべく、産業科学研究所の地域研究は、1980年度からは、「3ヶ年の第二次研究計画」として、メンバーの分業によって推進される。企業行動会議、地域産業モデル都市調査、愛知県中小企業振興ビジョン、活路開拓調査指導事業という班体制となっていた。その調査研究は外部諸団体の実施した実態調査への参画という形態ではあったが、メンバーとしては、企業行動会議には、山崎誉雄、北村研一郎、地場産業モデル都市調査には、山崎誉雄、柿野欽吾、岸田賢次、横井弘美、愛知県産地中小企業振興ビジョンが、西村嵩夫、柿野欽吾、活路開拓調査指導事業が、西村嵩夫、岸田賢次という構成であった(006)。

「昭和58年度からは瀬戸商工会議所からも補助金を」得ており(010)、更に「昭和59年には石田経済科学研究財団の助成(受賞という形で)を」受ける(011)。同財団からの研究助成は、「横井弘美教授を代表者とする「地域経済の変化に対応する地場産業の動態分析—とくに瀬戸陶磁器産業の実態調査を中心として—」に対して」であり、「この研究助成の受賞は経済・地域振興・

産業部門の領域から選ばれたものであり」「地域研究会の成果が社会から正しく評価されていることの証し」ともなった(010)。同財団の助成金による「調査の中間報告書」は『地域経済の変化に対応する地場産業の動態分析』である(015)。

その後、1987年度には、財団法人シキシマ学術・文化振興財団の助成金に対する申請(研究課題:「ノベルティ産業に対する円高の影響」)が採択されている(015)。

地域研究会の調査研究は、陶磁器産業の分析から開始したが、名古屋学院大学の教員スタッフの専門の広がりや、日本経済が多様な諸問題に直面してきたことから、1989年11月には、従来のように陶磁器産地の調査研究の成果を年次報告書などの形態で公表するやり方から、「陶磁器産業にのみ調査対象を求めるのではなく、大学が立地する瀬戸市のみならず、瀬戸市が所在する愛知県及びその周辺の東海・中部日本地域のより広い地場産業の全てを研究対象とする」に至ったことから、「研究会の調査方針を明確にするために、機関誌として、年1回発行の年報とするために、新たに『地場産業研究』第12号として」、調査研究の成果を公表するに至る(017)。地域研究会としての共同研究による陶磁器産業の調査研究は、『地場産業研究(地域研究会1997年度報告書)第20号』(名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会、1998年)(022)をもって終了している。

二 収集資料の概要

上で見た産業科学研究所の運営については、「通産省や愛知県商工部の実態調査に総出で協力した関係もあって、[産業科学]研究所独自のものは実施していない」という特徴があった。したがって、「各チームの調査資料はすべて」「研究メンバー全員に公開され、討議されてきた」(006)。収集した文献資料が残されたのは、そうした事情によるものであった。

そこで収集された資料文献の中心をなすのは、各種の調査研究の報告書である。各地の産地に関する1970-80年代に刊行された報告書は、産地の歴史や現状が知られるものであり、その報告書が、その性格から、もはや入手しえないものも含まれていると思われることからしても、その価値について縷々説明することは不要であろう。掲載した文献資料以外にも、コピー製本したものもかなりの冊数であり、併せて保存さるべきものと考えられる。

収集資料について、若干立ち入っておきたいのは、(IV)窯業関係史資料に分類したものである。陶磁器産地の多くは個人経営の窯元(窯屋)からなっており、産地の情報は、その時々、各種の報告書や各窯元が発行したパンフレットなどによるものとなる。同資料は、行政などの発刊する報告書や統計書類からは、うかがい知ることのできない実態を示すものとなっている。本資料には、年代不詳のものも多いことから、収集した時期から判断していただくためにも、産業科学研究所が実施した産地調査の時期を見ておこう。表1の通りである。

表1 産業科学研究所の産地調査地と実施年月（調査順）

産地（都道府県）	調査実施年月
有田焼（佐賀県）	1978年2月，6月・9月，1983年10月，1985年度，1986年度
波佐見焼（長崎県）	1978年2月，6月・9月，1983年10月，1985年度
美濃焼（岐阜県）	1978年5月，1987年度
万古焼（三重県）	1978年7月
京焼・清水焼（京都府）	1978年7月，1986年3月
常滑焼（愛知県）	1978年10月
九谷焼（石川県）	1979年3月，1983年11月，1986年度
砥部焼（愛媛県）	1981年3月，1987年度
備前焼（岡山県）	1981年3月，1987年度
会津本郷焼（福島県）	1981年8-9月，1988年3月
益子焼（栃木県）	1981年8-9月，1985年度
越前焼（福井県）	1983年11月，1986年度
萩焼（山口県）	1984年10月
丹波立杭焼（京都府）	1986年度
常滑焼（愛知県）	1987年，1988年
大堀相馬焼・相馬駒焼（福島県）	1988年7月
信楽焼（滋賀県）	1993年2月
伊賀焼（三重県）	1993年2月
台湾	1981年11月，1982年11月

出所 文献資料No.007, 012, 014, 015, 019, 020。

かつての高度成長期の1960年代には、「窯業は，愛知県・岐阜県・佐賀県・京都府下に密集し，昭和40年度は年産額989億円に達し，マス・プロの近代設備の中で量産化されて」いた。その一方で，依然として，「家族労働的な作業形態で」「家族一体となつての労働」に支えられた窯屋・窯場（窯元）から，産地は構成されていた（永竹威『日本の陶磁器 その窯場を訪ねて』社会思想社，1966年）。

ここでは，日本経済の激変期であった1970-80年代において，産地の窯元にあつては，市場開発のためには，量産規模の引き上げによるコスト削減をはかるか，高付加価値の製品づくりを一層推進するか，あるいは，陶磁器生産からの転換をはかるか，のいずれかを迫られていたものと思われることから，産地の窯元の製品デザインを左右する上絵付用の上絵窯について見ておこう。

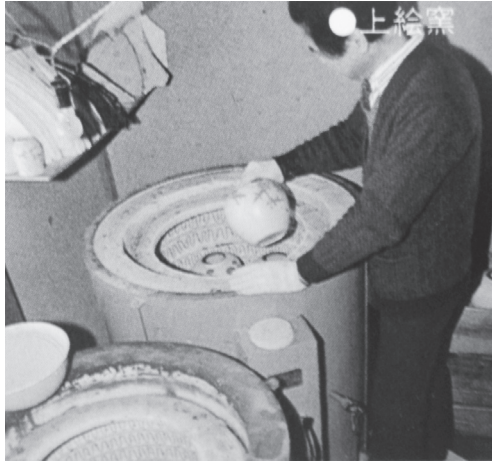


写真1 九谷焼の上絵窯

出所 「伝統工芸 九谷焼」(168)。

写真1は、「伝統工芸 九谷焼」(168)に掲載されている「上絵窯」のものである。九谷焼の工程は、「陶石の粉砕，ロクロ成形，本窯，上絵付，そして上絵窯」からなっている(168)。1980年代の九谷焼の寺井町においては，窯元5，問屋(卸売販売業)130，絵付業者約350という生産組織となっていた。写真1に掲げた「上絵付業者の殆どは家庭工業の形態をとり，それぞれ小規模な上絵窯を持ち，家族だけで仕事をしているものが大部分」であったという。それでも当該期には「上絵窯が全部電気窯になり，企業経営の合理化の面からも素地製造—上絵付—販売と一貫営業の形をとる業者もぼつぼつ出て来た」という(173)。

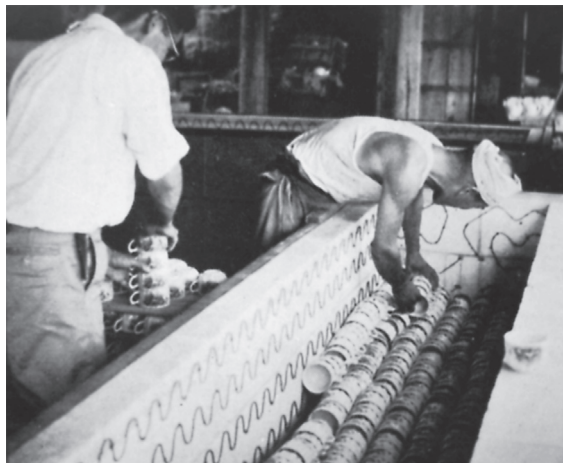


写真2 瀬戸の電気窯(上絵焼付)

出所 瀬戸市商工課『SETO POTTERY CENTER』瀬戸市商工課，1957年4月(106)。

これに対して、瀬戸においては、日本経済の高度成長開始期において、すでに、輸出向け洋食器・玩具などの陶磁器製品の大量生産を推進しており、写真2のように上絵付後の上絵焼付には、電気窯が使用されていた(106)。1970-80年代の対応は、瀬戸陶磁器の生産工程である、「製土—成形—乾燥—下絵付—施釉—焼成—上絵付—上絵焼付—完成」において、蓄積された焼きの技術を転用したものとならざるを得ないであろう。具体的には、かつて瀬戸市内に立地していた山寿セラミックスとMARUWAの事例であろう。現在、瀬戸と尾張旭市内に工場立地する両社は、ファインセラミックスの分野を開拓することで、焼成技術の転用によって、陶磁器メーカーとしての持続的発展を確保し、域内の代表的企業となっている(『尾張旭市誌 現代史編』2011年,参照)。



写真3 益子焼の登窯

出所 塚本製陶「民芸 益子焼」,〔年次不詳〕(165)。

他方、伝統的な製造を持続している産地と思われる益子焼の産地、益子町には、製陶業者(窯元)が約140、益子焼販売業者が約40となっていた。生産工程は、「陶土採掘—水簸(すいひ)—土もみ—成形—素焼—絵付—焼成—窯出し」となっており、登窯による焼成となっていた。産地としては「昭和初期までの台所用品」中心からの製品転換を経ていた(1980年代,163)。登窯は、素焼と本焼の両方で使用されることが多いとしている(166)。付加価値生産の高い製品を支えるのは登窯であり、「窯太郎といわれる熟練工」であった。これについては、「本焼窯として益子では登り窯を使用してきましたが、最近ではこの登り窯のほかに倒焰式窯(角窯)、シャトルキルン、トンネルキルンといった新しい形式の窯も用いられるようになってきました」ということがあった(165)。

などなどのことが、知られるのが(IV)窯業関係史資料であった。

資料一覧

凡例

- (1) 冊子名, 作成者〔()で表示〕, 発行所, 発行年月の順である。作成者と発行所が同じ場合には, 発行所名は省略した。
- (2) 分類は, 愛知県内については, 市町村別に配列し, 都道府県については, 東海三県を優先し, それ以外については, 通例の配置順となっている。
- (3) 各項目とも年次別に配列されている。
- (4) [] は, 編集者が補ったものであることを示す。
- (5) 「 」 は, 冊子体になっていないもの, 1枚もの, パンフレット, リーフレット, 絵はがき, などであることを示す。

(I) 名古屋学院大学産業科学研究所の研究報告書

(文献資料No.)

- 『「瀬戸経済圏の現状分析と将来のヴィジョン—地場産業を中心に—」に関する昭和50年 001
度地域研究経過報告書』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 1976年。
- 『瀬戸地域地場産業等実態調査結果速報』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 1977年4月。 002
- 『瀬戸地域地場産業等実態調査結果速報(抄) 昭和51年度』, (横井弘美), 名古屋学院大学, 003
1977年。
- 『瀬戸地域地場産業等実態調査中間報告』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 1978年3月。 004
- 『瀬戸陶磁器産業の現状と今後の方向』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 1980年6月。 005
- 『瀬戸陶磁器産業と住民意識』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 1981年5月。 006
- 『低成長下における瀬戸陶磁器産業をめぐる諸問題』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 007
1982年5月。
- 『瀬戸陶磁器産業の研究—その伝統性と近代化— 「愛知県陶磁器産業物流実態調査」 008
課題番号 245046 昭和54年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
研究代表者 小林茂(名古屋学院大学経済学部教授)』(名古屋学院大学地域研究会編),
名古屋学院大学産業科学研究所, 1982年11月。
- 『瀬戸陶磁器産業をめぐる他産地の現況』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 1983年5月。 009
- 『陶磁器産業をめぐる瀬戸と他産地』, 名古屋学院大学産業科学研究所, 1984年8月。 010
- 『瀬戸陶磁器産業研究選集』, (名古屋学院大学地域研究会編), 011
名古屋学院大学産業科学研究所, 1985年6月。
- 『陶磁器産業をめぐる瀬戸と他産地(続)』, (名古屋学院大学地域研究会), 012
名古屋学院大学産業科学研究所, 1985年8月。
- 『瀬戸をめぐる陶磁器諸産地の動向』, (名古屋学院大学地域研究会), 013
名古屋学院大学産業科学研究所, 1986年9月。

『家庭用陶磁器産業の最近の生産・流通動向―産地間比較分析をめざして―』 (地域研究会), 名古屋学院大学産業科学研究所, 1987年7月。	014
『最近の外部・経済環境変化に対する陶磁器産業の対応 ―異時点間比較を中心として―』 名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会, 1988年7月。	015
『米国ファインセラミックス産業の競争力評価 米国務省産業分析課編』, (地域研究会訳) 名古屋学院大学産業科学研究所, 1988年7月。	016
『地場産業研究 第12号 (地域研究会1988年度報告書)』 (名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会), 1989年11月。	017
『地場産業研究 第13・14号 合併号』, (名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会), 1991年3月。	018
『地場産業研究 第16号 1993年度』, (名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会), 1994年7月。	019
『地域研究会 第17号 1994年度』, (名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会), 1995年6月。	020
『地場産業研究 (地域研究会 1996年度報告書) 第19号』 (名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会), 1997年6月。	021
『地場産業研究 (地域研究会 1997年度報告書) 第20号』 (名古屋学院大学産業科学研究所地域研究会), 1998年。	022
(Ⅱ) 報告書	
(1) 政府機関, 全国	
『イタリアの陶磁器ノベルティ産業 産業調査 (特定産業競争力調査) No. 80-5』 (日本貿易振興会 海外経済情報センター), 1981年3月。	023
『陶磁器飲食器需要動向の概要―消費者, 流通業界アンケート調査から―』 (日本陶磁器工業協同組合連合会), 1982年3月。	024
『米国の陶磁器ノベルティ―市場調査 マーケティングシリーズ (978)』 (日本貿易振興会), 1982年2月。	025
『陶磁製タイル流通の近代化―その問題点と改善の方向―』, (通商産業省産業政策局監修・ 財団法人流通システム開発センター編集), 1984年。	026
『〔業種別流通構造調査〕陶磁製飲食器流通構造調査報告書 昭和59年度通商産業省委託 事業』, (財団法人流通経済研究所), 1985年3月。	027
『地場産業問題研究会報告書』, (日本商工会議所), 1989年7月。	028
(2) 中部地方	
『これからの産業政策と東海地方の対応』, 中部経済連合会, 1975年4月。	029

「シンポジウム 瀬戸の窯業の現状とあす」, (中部総合開発推進委員会 加藤武雄記),	030
1978年7月。	
『中部地方における主要産業の国際競争力の現状と今後の方向』, 中部経済連合会,	031
1979年9月。	
(3) 愛知県	
『陶磁器産地卸売業実態調査報告書』, (愛知県商工部),	032
1974年3月。	
『窯業民俗資料調査報告 1 (瀬戸市)』, 愛知県教育委員会,	033
1974年3月。	
『愛知県陶磁器産業の実態と進むべき方向—常滑・三河地区の陶管・粘土瓦・植木鉢の 振興計画—』, (愛知県),	034
1975年3月。	
『愛知県輸出地場産業の現状と問題点—その将来像を求めて—』, (愛知県),	035
1978年3月。	
『愛知県主要産業ビジョン 第IV編 陶磁器製造業』, 愛知県商工部,	036
1979年3月。	
〔『愛知県主要産業ビジョン 昭和54年』として製本〕。	
『愛知県輸出地場産業の進むべき方向』, (愛知県),	037
1979年3月。	
『愛知県産地中小企業振興ビジョン—瀬戸陶磁器産地(愛陶工関係)—』, 愛知県商工部,	038
1979年11月。	
『愛知県産地中小企業振興ビジョン—名古屋陶磁器産地—』, 愛知県商工部,	039
1979年11月。	
〔『愛知県産地中小企業ビジョン 昭和54年』として製本〕	
『愛知県産地中小企業振興ビジョン—瀬戸陶磁器産地(瀬戸完成工関係)—』, 愛知県 商工部,	040
1979年11月。〔『愛知県産地中小企業ビジョン 昭和54年』として製本〕	
『活路開拓調査指導事業調査報告書—瀬戸陶磁器産業の現状とビジョン—産地振興計画 作成のための調査・研究』, 愛知県陶磁器工業組合,	041
1980年3月。	
『愛知県産地中小企業振興ビジョン—常滑・三河陶磁器産地—』, (愛知県商工部),	042
1980年8月。	
『地場産業モデル都市(瀬戸市)調査 資料集I』, 愛知県商工部,	043
1980年8月。	
〔『地場産業モデル都市(瀬戸市)調査 資料集II』, 愛知県商工部, 1980年11月, 及 び, 『地場産業モデル都市(瀬戸市)調査 資料集III』, 愛知県商工部, 1981年2月, と合冊〕。	
『地場産業モデル都市(瀬戸市)調査 資料集II』, 愛知県商工部,	044
1980年11月。	
『地場産業モデル都市(瀬戸市)調査 資料集III』, 愛知県商工部,	045
1981年2月。	
『地場産業モデル都市(瀬戸市)調査報告書』, 愛知県,	046
1981年3月。	
『新愛知県陶磁器産業振興計画—瀬戸・名古屋地区—』, 愛知県,	047
1985年3月。	
(4) 瀬戸市	
『瀬戸市振興に関する調査報告』, (財団法人東京市政調査会編), 瀬戸市,	048
1950年9月。	

- 『瀬戸市窯業における児童の労働と生活』, 名古屋大学教育学部教育社会学研究室, 1953年。 049
- 『瀬戸地区の陶磁器及び関連製品製造業の労働事情』, (愛知労働基準局給与課・瀬戸労働基準監督署), 瀬戸労働基準協会, 1954年。 050
- 『調査と資料 第26号 瀬戸地方陶磁器工業に関する実態調査』, (酒井正三郎ほか), 名古屋大学経済学部経済調査室, 1964年2月。 051
- 『瀬戸市新総合計画 基本計画』, (瀬戸市企画財政課), 瀬戸市, 1974年5月。 052
- 『陶磁器の重金属を含むスラッジの焼結と溶出試験』, (愛知県陶磁器工業組合公害対策委員会・瀬戸市産業振興会議産業公害専門分科会), 1976年9月。 053
- 『通商産業省委託事業 都市地域総合経済団体ビジョン作成事業報告書』 瀬戸商工会議所・都市地域総合経済団体ビジョン作成瀬戸小委員会, 1977年2月。 054
- 『輸出陶磁器産業の望ましい将来像』, 瀬戸輸出陶磁器完成工業組合, 1977年9月。 055
- 『活路開拓調査指導事業調査報告書—瀬戸陶磁器産地の振興計画作成のための調査, 研究』 瀬戸輸出陶磁器完成工業組合, 1979年12月。 056
- 『昭和54年市民意向調査 調査結果報告書』, (瀬戸市市長公室企画課), 1979年。 057
- 『市民所得 昭和52年度』, (瀬戸市市長公室企画課), 1979年10月。 058
- 『経済団体を中心とする地域行動のあり方に関する調査報告書—〈魅力ある地域社会形成のために〉— 昭和54年度定住構想推進調査費』, (通商産業省産業政策局・日本商工会議所・瀬戸商工会議所), 1980年3月。 059
- 『瀬戸市における企業行動について意識ならびに実態に関する調査報告書 昭和54年度 通商産業省委託調査』, 瀬戸商工会議所, 1980年3月。 060
- 『瀬戸の21世紀への道—市民・企業の融和のもとに— (瀬戸地区企業行動会議)』 瀬戸商工会議所, 1981年2月。 061
- 『あしたの瀬戸焼を考えよう—省エネルギー編— 昭和56年度組合が行う活路開拓調査指導事業報告書』, 愛知県陶磁器工業組合, 1982年3月。 062
- 『あしたの瀬戸焼を考えよう—需要減退等への対応編— 昭和58年度組合が行う活路開拓ビジョン調査事業 (地域交流枠)』, 愛知県陶磁器工業協同組合, 1984年2月。 063
- 『瀬戸市産業教育検討委員会報告書』, 瀬戸市産業教育検討委員会, 1984年11月。 064
- 『昭和62年度 瀬戸市埋蔵文化財年報』, 瀬戸市教育委員会, 1989年3月。 065
- 『研究紀要 VIII』, 瀬戸市歴史民俗資料館, 1989年。 066
- (5) 尾張旭市**
- 『尾張旭市第二次総合計画 緑と太陽に恵まれた豊かな健康都市をめざして』 愛知県尾張旭市, 1982年。 067

(6) 常滑市

- 『活路開拓調査指導事業調査報告 常滑・三河陶磁器産業の現状とビジョンー常滑・三河陶磁器産地の振興計画作成のための調査, 研究一』, 常滑陶磁器工業協同組合・三河陶器協同組合, 1980年9月。 068
- 『常滑・三河陶磁器産地振興計画』, 常滑陶磁器工業協同組合・三河陶器協同組合, 1980年11月。 069
- 『常滑焼産地景気動向調査』, (下平尾勲), 常滑市役所, 1982年1月。 070

(7) 岐阜県

- 『省資源・省エネルギー時代における東濃地区陶磁器産業の発展方向』 財団法人岐阜県シンクタンク, 1975年頃。 071
- 『陶磁器デザイン概論 昭和53年度組合が行う活路開拓調査指導事業報告書』 (日根野作三), 岐阜県陶磁器工業協同組合連合会, 1979年3月。 072

(8) 三重県

- 『万古焼陶磁器消費者アンケート調査結果報告書』, 三重県, 1977年9月。 073
- 『昭和52年度 四日市ばんこ焼産地診断報告書』, 三重県, 1977年11月。 074
- 『四日市万古焼振興ビジョン』, 三重県, 1980年1月。 075

(9) 福島県

- 『福島県地場産業振興調査報告書』, 福島大学地域開発研究会, 1980年3月。 076

(10) 石川県

- 『九谷焼産地診断報告書』, 石川県商工労働部中小企業指導課, 1982年2月。 077

(11) 福井県

- 『越前焼産地診断報告書』, 福井県商工労働部中小企業課, 1984年3月。 078

(12) 京都府

- 『京焼業界産地診断報告書 No. 6-6』, 京都府立中小企業総合指導所, 1971年3月。 079
- 『清水焼団地診断報告書 山科地区陶磁器ならびにその関連業界の産地としての集団化の運営と対策を中心として』, (京都市中小企業指導所), 1971年3月。 080
- 『奈がれ』第19号, 安田学園商品クラブ, 東京, 1977年4月。 081
- 『京都府地場産業実態調査報告書』, 京都府商工部, 1981年3月。 082

(13) 大阪府	
『大阪陶磁器業産地診断報告書』, 大阪府商工部, 1988年3月。	083
(14) 岡山県	
『備前焼原料』, 岡山県工業技術センター, 1980年11月。	084
(15) 山口県	
『「だいだいと白壁と萩焼のふるさと・萩」—21世紀の観光文化都市づくりをめざして— 萩商工会議所経済ビジョン調査策定報告書』, 萩商工会議所, 1982年3月。	085
『特定地場産業振興指針〈萩焼〉』, 山口県, 1985年3月。	086
(16) 愛媛県	
『昭和54年度 活路開拓調査指導事業報告書(砥部焼の協業的環境の醸成と販売体制の 強化に関するビジョン)』, 伊予陶磁器協同組合, 1980年3月。	087
『昭和59年度 地域産業活路開拓促進事業報告書(ビジョン実現化事業) テーマ 新製品の開発と新市場の開拓』, 伊予陶磁器協同組合, 1985年3月。	088
(17) 佐賀県	
『昭和54年度活路開拓事業 産地概況調査報告書』, 有田町・大有田焼振興協同組合, 1980年3月。	089
『有田焼産地における最近の不況の諸原因とその対応策』, 佐賀県有田町産業課, 1980年12月。	090
『有田焼の消費地動向調査』, 佐賀県有田町企画産業課・大有田焼活性化対策協議会, 1985年3月。	091
『有田焼流通業調査報告書』, 佐賀県有田町企画産業課・大有田焼活性化対策協議会, 1985年5月。	092
『有田町総合計画—国際的な陶磁文化のまち 肥前窯業圏中枢のまちをめざして—』 (有田町企画産業課), 有田町, 1985年6月。	093
(18) 長崎県	
『波佐見焼産地診断報告書』, 長崎県, 1984年12月。	094
『波佐見陶磁器産地診断報告書』, 長崎県, 1989年3月。	095
『三川内陶磁器産地診断報告書』, 長崎県, 1989年3月。	096

(Ⅲ) 窯業関係史誌

(1) 瀬戸市

『やきもの風土記』, (毎日新聞中部本社編), 毎日新聞社, 1978年。 097

『古瀬戸 洞 今昔四方山話』, (古瀬戸連区誌編纂委員会), 古瀬戸自治連合会, 1988年。 098

(2) 名古屋市

『昭和陶業史余聞』, (三井弘三), 中部経済新聞社, 1980年。 099

『名古屋陶業の百年 会館の壁は聞いた百五十人の回想』, 財団法人名古屋陶磁器会館, 1988年。 100

(3) 三重県

『三重県陶窯見聞録』, (鈴木敏雄), 三重県郷土資料刊行会, 1971年。 101

(4) 石川県

『九谷の秘法 デザインから色絵まで』, (嵐一夫), 北国出版社, 1976年。 102

『九谷焼 産業と文化の歴史』, (矢ヶ崎孝雄), 日本経済評論社, 1985年。 103

(5) 京都府

『京都窯芸史』, (中ノ堂一信), 淡交社, 1984年。 104

(6) 佐賀県

『有田=白磁の町』, (角田嘉久), 日本放送出版協会, 1974年。 105

(Ⅳ) 窯業関係史資料

(1) 瀬戸市

『SETO POTTERY CENTER』, (瀬戸市商工課), 瀬戸市役所, 1957年4月。 106

『SETO POTTERY CENTER せとものゝ瀬戸』, (瀬戸市商工観光課), 瀬戸市役所, 1961年5月。 107

『SETO POTTERY CENTER せとものゝ瀬戸』, (瀬戸市商工観光課), 瀬戸市役所, 1965年10月。 108

『花筐 加藤春逸翁喜寿祝賀』, (加藤春逸), 寺沢金重, 1968年。 109

『けい砂』, (愛知県珪砂鉦業協同組合), 1970年。 110

『瀬戸』, (瀬戸市民生経済部商工観光課), 愛知県瀬戸市, 1975年3月。 111

『瀬戸 陶芸協会作家名鑑』, (瀬戸陶芸協会), 1975年9月。 112

「せともの名で知られる陶都 瀬戸 SETO」,〔1975年頃〕	113
『50年史』, (瀬戸陶磁器事業協同組合), 1976年10月。	114
『1977 瀬戸地方商工名鑑 創立30周年記念号』, (瀬戸商工会議所), 1977年。	115
『けい砂の50年史』, (愛知県珪砂鉦業協同組合), 1977年。	116
『瀬戸 SETO CITY』, 愛知県瀬戸市民生経済部商工観光課, 1977年頃。	117
『組合員名簿 昭和53年』, (瀬戸輸出陶磁器完成工業組合), 1978年頃。	118
『瀬戸伝統陶芸会名鑑』, (瀬戸伝統陶芸会), 1979年9月。	119
『瀬戸 SETO』, 瀬戸市環境経済部商工観光課, 1979年頃。	120
『瀬戸 陶芸協会作家名鑑』, (瀬戸陶芸協会), 1980年9月。	121
『瀬戸 せともの名で知られる瀬戸の焼物』, (瀬戸焼PR冊子実行委員会・ 瀬戸市環境経済部商工観光課), 瀬戸市地場産業モデル都市推進協議会, 1981年2月。	122
『瀬戸陶芸協会展』, 瀬戸陶芸協会, 1981年。	123
『瀬戸 市勢要覧』, 1981年頃。	124
『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅰ』, 瀬戸市歴史民俗資料館, 1982年3月。	125
『The Products of Seto 瀬戸』, SETO EXPORT POTTERY MANUFACTURERS ASSOCIATION, 1983年。	126
『組合及び瀬戸地区 (一部豊田市を含む) 珪砂業界の概況 (昭和59年4月1日現在)』 愛知県珪砂協同組合, 1984年。	127
『展示概要』, (瀬戸市歴史民俗資料館), 1989年3月。	128
『瀬戸 商工名鑑 会員・特定商工業者 1993』, (瀬戸商工会議所), 1993年。	129
『長江明治—瀬戸近代陶芸の先駆者— 瀬戸市制施行70周年記念特別企画展』 (瀬戸市歴史民俗資料館), 1999年10月。	130
『価値あるかけ橋 愛知県陶磁器工業組合流通センター』 愛知県陶磁器工業組合流通センター,〔年次不詳〕。	131
 (2) 常滑市	
『常滑市立陶芸研究所』, 1961年頃。	132
『1972 とこなめの統計』, (常滑市総務部商工課), 愛知県常滑市, 1972年9月。	133
『1974 とこなめの統計』, (常滑市民生経済部商工課), 愛知県常滑市, 1974年4月。	134
『1978 とこなめの統計』, (常滑市経済部商工課), 愛知県常滑市, 1978年4月。	135
『とこなめ』, 常滑市, 1984年3月。	136
『INAX 常滑東工場』, 株式会社INAX, 1984年頃。	137
『企画展 常滑焼き 大物窯詰め技法展』, 常滑市民俗資料館, 1986年。	138
『常滑市民俗資料館』, 1986年。	139
『繁栄と幸運を招く縁起のよい贈り物』, (永和商店),〔年次不詳〕。	140

「とこなめ 常滑 ごあんない」, 常滑市, [年次不詳]。	141
『常滑 とこなめ』, (常滑市), [年次不詳]。	142
(3) 名古屋市	
『輸出陶磁器便覧 昭和49年度』, 総合通信社, 1974年7月。	143
『国内陶磁器・硝子器商工総覧 昭和50年度』, 総合通信社, 1975年6月。	144
『国内陶磁器・硝子器商工総覧 昭和52年度』, 総合通信社, 1977年6月。	145
「総合通信 陶業版」, 総合通信社, 第1565号(1986年4月5日発行) — 第1566号 (1986年4月15日発行), 第1568号(1986年5月15日発行) — 第1627号(1988年2月 25日発行), 第1629号(1988年3月15日発行) — 第1633号(1988年4月25日発行)。	146
(4) 岐阜県	
『多治見美濃焼卸商業団地 ご案内』, (多治見美濃焼卸センター協同組合), 1975年。	147
『岐阜県の産業 美濃焼』, (社団法人土岐青年会議所), 社団法人日本青年会議所岐阜ブロック協議会, 1976年9月。	148
「岐阜県陶磁器統計資料」, (岐阜県陶磁器工業協同組合連合会), 1977年頃。	149
『ラスター彩の栞』, (加藤卓男), 1980年頃。	150
『第2回 国際陶磁器展美濃 '89』, (国際陶磁器フェスティバル美濃 '89開催委員会), 1989年。	151
(5) 三重県	
「組合の概況」, (万古陶磁器工業協同組合), 1976年。	152
(6) 宮城県	
『東北の近世陶磁』, 東北陶磁文化館, 1987年。	153
(7) 福島県	
『会津本郷焼の歩み』, 福島県陶業事業協同組合, 1969年2月。	154
「大堀 相馬焼」, 大堀民芸会館, [1978年頃]。	155
「会津 宗像窯 本郷」, 株式会社宗陶苑, [1981年頃]。	156
「相馬駒焼陶来歴」, 窯元 田代清治右衛門, [1983年頃]。	157
『会津本郷焼 土と炎と人』, (会津本郷焼事業協同組合), 1987年9月。	158
『本郷町史』, (本郷町), 1977年。	159
『大堀相馬焼 創業三百年記念誌』, (大堀相馬焼協同組合), 1988年3月。	160
「意匠登録 大堀 相馬焼」, 近藤昭陶器, [年次不詳]。	161

「白鳳山とやきものの町 本郷 ほんごう」, 本郷町, [年次不詳]。 162

(8) 栃木県

「焼物のふるさと 益子 県立自然公園」, 益子町観光協会, [1975年頃]。 163

「益子参考館一入館のしおり」, 財団法人益子参考館, [年次不詳]。 164

「民芸 益子焼」, (塚本製陶), [年次不詳]。 165

「〈焼物のふるさと〉 益子 県立自然公園」, 益子町観光協会, [年次不詳]。 166

(9) 石川県

「九谷焼団地店舗等集団化事業概要」, (九谷焼団地協同組合), 1982年頃。 167

「伝統工芸 九谷焼」, (九谷陶芸村九谷焼団地協同組合), 1984年頃。 168

『九谷焼330年』, (二羽弥ほか), 寺井町九谷焼資料館, 1986年8月。 169

「産地総括表 中小企業庁長官官房調査課提出」, 170

(石川県九谷陶磁器商工業協同組合連合会), 1986年12月。

『観光物産課事務概要 昭和61年度』, 石川県商工労働部観光物産課, 1987年。 171

「[石川県陶磁器商工業協同組合名簿]」, [年次不詳]。 172

「九谷焼の里 陶郷寺井町」, 寺井町産業課, [年次不詳]。 173

『九谷のふるさと CRADLE OF KUTANI』, 九谷焼卸団地協同組合, [年次不詳]。 174

(10) 福井県

『今日の越前焼』, (渡部智), 越前焼振興会, 1980年。 175

『福井県出土の 中世陶器展』, (福井県陶芸館), 1980年。 176

『越前・若狭の民窯展 福井県陶芸館秋季特別展』, (福井県陶芸館), 1983年。 177

『福井県窯業誌』, 福井県瓦工業協同組合, 1983年。 178

「福井県工業技術センター ご案内」, 1985年頃。 179

『今日の越前焼』, (渡部智), 越前焼振興会, 1986年5月。 180

『MIND INFORMATION FROM FUKUI』, (福井県伝統的工芸品産地指定組合協議会), 181
1986年。

「古窯のふるさと越前陶芸村 福井県陶芸館」, 1986年頃。 182

(11) 滋賀県

「近江, 信楽 宗陶苑」, 株式会社宗陶苑, [1979年頃]。 183

「宗陶苑 たぬきの事」, 株式会社宗陶苑, [年次不詳]。 184

(12) 京都府

『会社の概要 経歴書』, (共和碍子株式会社), [1967年頃]。	185
『協同組合の概要』, (協同組合炭山陶芸), [1976年頃]。	186
『京焼・清水焼』, 清水焼団地協同組合, [1976年頃]。	187
『〔京都陶磁器協同組合の概況〕』, [1977年頃]。	188
『京焼・清水焼』, 財団法人京都陶磁器協会, [年次不詳]。	189
『清水焼団地協同組合定款』, [年次不詳]。	190
『財団法人京都陶磁器協会 概要』, [年次不詳]。	191
『京都 雲楽窯』, 清水焼 雲楽窯, [年次不詳]。	192
『清水焼』, 京都陶磁器会館, [年次不詳]。	193
『清水焼 京焼』, 青窯会会館, [年次不詳]。	194

(13) 大阪府

『なにわの陶業史』, (竹田政広), 大阪府陶磁器商業協同組合, 1982年9月。	195
---	-----

(14) 兵庫県

『兵庫県の地場産業』, 財団法人兵庫県中小企業振興公社・兵庫県産業情報センター, 1986年3月。	196
---	-----

(15) 岡山県

『備前焼』, 岡山県工業技術センター備前陶芸センター, [No. 1] [1976年頃]。	197
『備前焼』, 岡山県工業技術センター備前陶芸センター [No. 2], [1976年頃]。	198
『備前焼—その魅力—』, (千神幸雄), 岡山県備前陶芸会館, 1984年5月。	199
『焼き物のふるさと 備前』, 岡山県備前焼陶友会・備前市・備前市観光協会, 1985年。	200
『焼き物のふるさと 備前』, 岡山県備前焼陶友会・備前市・備前市観光協会, 1987年。	201
『岡山県備前陶芸美術館』, [年次不詳]。	202
『東備紀行 備前 びぜん』, 備前市, [年次不詳]。	203
『備前 ふるさとセンター』, 備前焼伝統産業会館・岡山県備前陶芸美術館, [年次不詳]。	204

(16) 山口県

『はぎ 商工名鑑 1982』, (萩商工会議所), 1982年3月。	205
『統計 萩 昭和57年度版』, (萩市総務部企画統計課), 萩市, 1982年7月。	206
『伝統工芸 萩焼窯元 天鵬山 '83 ~』, (天鵬山), 1983年。	207

(17) 愛媛県

- 『砥部焼 手づくりの味わい』, (砥部町), [1982年頃]。 208
- 「やきものの里 砥部」, [絵葉書, 年次不詳]。 209
- 「TOBEYAKI」, (砥部町観光協会), [年次不詳]。 210
- 「焼物のまち・郷愁の里 とべ」, (愛媛県・砥部町), [年次不詳]。 211
- 「砥部焼をあなたの手で」, (砥部町陶芸創作館), [年次不詳]。 212

(18) 佐賀県

- 「組合要覧」, (有田焼工業協同組合), 1968年頃。 213
- 「今右衛門」, (今泉今右衛門), 1975年頃。 214
- 「柿右衛門の菓—その系譜と製品の特色—」, (酒井田柿右衛門), 1975年頃。 215
- 「肥前窯業界」No. 151, 肥前新聞社, 1977年9月30日。 216
- 「有田焼直売会館」, 有田焼直売協同組合, 1977年。 217
- 『有田 町勢要覧 1982』, (有田町役場商工企画課), 有田町役場, 1982年8月。 218
- 「有田焼工業協同組合」, [年次不詳]。 219
- 「有田 源右衛門窯 家紋陶額」, (陶芸 源右衛門窯), [年次不詳]。 220

(19) 長崎県

- 『業務報告 昭和51年度』, (長崎県窯業試験場), 1977年。 221
- 『11 '78 '79 白山陶器』, (白山陶器株式会社), 1978年8月。 222

(V) 窯業関係伝記

- 『永井精一郎伝—昭和陶磁器貿易史を築く—』, (小出種彦), 永井精一郎伝記編纂委員会, 1974年。 223
- 『藤井達吉の生涯』, (山田光春), 風媒社, 1974年。 224
- 『有田陶業側面史(明治編) 松本静二の生涯 上』, (松本源次), 麦秋社, 1985年。 225
- 『常滑焼の開拓者 鯉江方寿の生涯』, (吉田弘), 愛知県郷土資料刊行会, 1987年。 226